



特集：建築を学ぶ学生の視点・論点



(上の写真は、学生の活動に関連した写真です。)

支部ニュース「AH!」の28号をお届けいたします。
今回は、建築を学ぶ学生に焦点をあてた特集を組みました。

特集：建築を学ぶ学生の視点・論点

「卒論を取り組んで」

信州大学大学院 社会開発工学専攻
卒業論文 佐野友彦

卒論で取り組んだ内容は、経年変化に着目した木造モルタル壁の振動台実験です。これは経年劣化の可能性がある既存木造住宅から抽出した壁構面と、これを新材で再現した壁構面の地震時挙動の差を振動台実験を通して比較検討していくものでした。

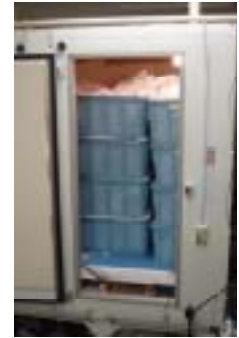


卒論を書くに当たってこのテーマを選んだのは、いつ発生するかわからない地震に対して新築からある程度年月を経過した木造住宅がどの程度の耐震性能を有しているかを定量的に把握する必要があると感じたからです。このテーマで卒論を書いたことにより、自分の中で既存木造住宅の耐震補強の必要性を実感すると共に、補強によりどの程度まで、耐震性能を向上させることができるのかに興味を持つことができました。今後、実大の既存木造住宅振動台実験を通して、補強前後及び新築と既存の耐震性能の比較を行うことにより、耐震補強の必要性をより明確に示していければと思っています。

「雪の可能性に魅せられ」

信州大学 社会開発工学科
卒業論文 小林義雄

北海道のような豪雪地域に比べ、まだ降雪の少ない長野でも、雪は有り余るほど降ります。



私の研究テーマはこの大量の雪を夏まで保存し、冷房時の冷熱源として使えないかを探るというもので、つまり雪氷冷熱です。北海道や東北では既に目新しいものではなくなりました。

長野ではまだ導入が進んでいません。そこで、長野でも実用化できるかを考えています。研究をして、今では雪を見るたびに、これを貯雪庫に入れられたらいいのに...と、まだ長野にまともな貯雪庫がないことを悔やんでいます。雪に限らず、気づけば利用価値のあるものが無造作に存在するのかもしれない。私は研究を通して、それに気づけるようになりたいと思うようになりました。

「踊る大交差点」

信州大学大学院 社会開発工学専攻
卒業制作 水本恭雄

踊る大交差点



子どもが伸びやかに育つ空間とはどのような空間でしょうか？

大きな空間、小さな空間、明るい空間、暗い空間、隠れる空間、全体を見渡せられる空間。



曲線の壁により広い空間や狭い空間が必然的に生まれてくる。そして、曲線にそっての動きや、遊びが生まれ、遊びも生まれる。

遊びが溢れている空間こそが子どもが伸びやかに育つ空間だと思います。



「各種アンカーの構造性能評価に関する研究」

新潟工科大学大学院
自然社会環境システム工学科 酒井 悟

私がアンカーについて研究をしてきた一番の理由としては中野先生が二年前新潟工科大学に来られた影響が非常に大きいです。大学に入学してあまり勉強に実が入らず、アンカーに関してはあまり勉強する機会がなかったのですが、自分がアンカーと出会って「これだ！このことを一生を賭けてやっつけよう！」と大学院に進学し今まで研究をしてきました。



昨年は、知識があまりにもなかったので文献の調査を中心に行い、アンカーの深さ、おもしろさを知りました。また、他の大学と共同研究を行なうなど研究を通じていろいろな体験ができました。最終的には目標として現在使われている日本、ACI、Fib と別々となっている引張耐力評価式の一つにまともなとを考えています。私の一生を賭けてその目標を成し遂げたいと思います。

「山葵園による環境共生空間の建築化」

長岡造形大学 環境デザイン学科建築コース
卒業制作 沼田 聡

山河、棚池に見え隠れする家々が集う集落は、遠く、続く山並と重なり、限りなく壮大なる借景を織り成し、人の美意識をくすぐる。



日本のみならず農村は、雄大な自然にかすかに人の気配を加える事。それは女性の紡ぐ繊細な美に、男性の築く豪胆な武が安らぎ、絶妙に調和する瞬間となる。

生み出される様相は、反応し合う化学反応の如く、精緻な芸術品さえも凌駕する。

山葵園とは、人工的にその地の持つ自然のポテンシャルを最大限に作物へとあてる環境制御を施している。水がせせらぎを生み出し、水にそよぐ緑の様相こそが山葵園である。

そのような場で建築は、自然の様相にこそ覆われ、水、緑、自然といった位相から制御されなくてはならない。

なぜなら建築は既に主体ではないのであるから。

「Flats - 趣味を極める集合住宅」

高岡短期大学 産業デザイン学科
卒業制作 高野 礼

今回、私は趣味を極める集合住宅の提案をします。

働く独身女性はたくさんの趣味を持っています。しかし、多くの独身女性は趣味を楽しめる住環境に住んで



いません。そんな彼女たちに自分の趣味をもっと楽しみ、極める事のできる空間を設計しました。

リサーチの結果、様々な趣味の中から独身三十代女性の多くが好み、特色のある趣味を3タイプ選びそれぞれにあった間取りを考えました。

Aタイプは、料理を好み、料理教室や、自慢の料理を使ったカフェの営業などを考えるタイプ。

Bタイプは、体での表現を好み、ダンス教室や、武道教室をひらくことを前提としたタイプ。

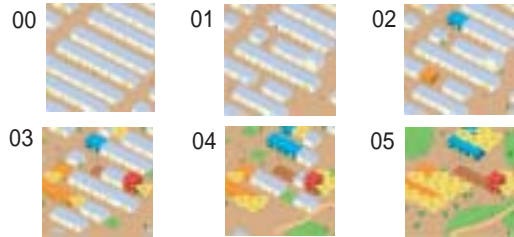
Cタイプは、アートを好み、油絵や彫刻などの制作や教室、ギャラリーを開く事を目的としたタイプ。

従来の選択の余地の少ない一人暮らしから、趣味だけでなく、ライフスタイルにあわせた住環境を積極的に選ぶことができる集合住宅を、がんばっている自分へのご褒美に、という考え方で提案します。

「仮設継承」

新潟大学大学院 自然科学研究科 中川 朋子

2004.10.23 新潟県中越地震発生。多くの人が家を奪われ、仮設住宅での生活を余儀なくされている。私が注目したのは仮設住宅での生活の質である。6,7世帯ひとまとまりのプレハブ住宅が、機械的にズラリと並び仮設住宅地は、違和感を感じさせながらも仮設のマチを形成しているようにも見える。居住できる期間は2年間とされているが、復興に伴って次々と家へ帰っていき仮設空き家が増え仮設のマチはどんどん寂しいマチになっていくことが懸念される。この仮設空き家を利用し、地震の記憶を留めながらも"楽しさ"のあるマチをつくることを提案する。



- 00 現状。このようにひたすら並んでいる。
- 01 仮設空き家となったものを撤去する。通路になったり、採光になったり。
- 02 仮設空き家の用途を転換する。仮設住宅に不足するコミュニティを補う。
- 03 空き地となった場所を膜の屋根で繋げる。強い日差しを避け雨を避け棚り所になる。
- 04 膜の屋根と空き地は拡大する。畑ができた隣人との会話弾む。
- 05 2年後。仮設住宅が撤去される。隣人とつくった畑、集会所、みんなの台所、楽しいものと地震の記憶が残って一種の公園となる。

「伝統構法木組み建築モデル」

富山国際職藝学院 建築職藝科
卒業制作 瀧 太

卒業製作は与条件をもとに梁間24寸×桁行30寸×軒高30寸の切妻木組モデルを、指定された部材の樹種と材寸及び仕口10種・継手4種を組み手鉋仕上げ



で、釘や金物を一切用いず組立てて完成させる。設計製作の期間は18日間で期限厳守が求められる。

設計では伏図・軸組図・仕口継手詳細図・木拾表などの指定図書のほか、墨付準備のために部材毎の原寸図を曲尺で作成した。

元・末の使い方、女木・男木の関係、木表・木裏の扱いなどの木のクセや木目を知った正確な墨付け、効果的加工手順と正確な刻み、そして"逃げ"をとることなどに苦労した。

第一の目標「早く」は基礎体力不足と体調管理不備で不本意に終わったが、「きれい」「正確」には満足することができた。この卒業制作で、木造建築に関わる主要な大作業をより現実に近い形で実践できたことは今後の実社会における職人仕事の自信に繋がると思う。

「自動車移動販売の可能性」

福井大学大学院 建築建設工学専攻
卒業論文 青木敦司

日本の街路は、面白味が無いと思う。「移動する」機能以外を放棄してしまっているかのようである。



一方、他国の街々には屋台やオープンカフェ建ち並び、屋外飲食や会話などのアクティビティを誘発しており、街路に様々な表情を与えている。

そこで、日本にもこのような要素を取り入れたいと思い、今回は自動車移動販売(=ネオ屋台)に注目した。調査は主に東京の「ネオ屋台村」の経営者・敷地提供者・周辺歩行者にヒアリング調査を行った。

結果として、

- 1) 敷地提供者 敷地の有効活用・活気の創出
- 2) 周辺歩行者 活気・楽しさ・便利さの享受

というネオ屋台に対し、高評価な回答が多く見られ、ネオ屋台の今後に可能性を感じることができた。

今後、日本の街路にも、ネオ屋台が溢れ、日本の街路に「街路を歩く・見る楽しさ」が生まれる事を期待したい。

「4枚合わせHP Shellに関する研究」

金沢工業大学大学院 高山研究室
卒業論文 縣知弘

私の所属する研究室では、Shell構造に関する実験的研究を行っており、私はHP Shellの研究に取り組んでいる。HP Shellは、正方形



形の対角線上の2点を上に引張ることのできる吊り構造と、残りの2点を下方向に引張ることのできるアーチ構造の2つの曲面を持ち合わせた構造体からなる。このHP Shellを4枚用いて棟の線で合わせて屋根を構成したものを、4枚合わせHP Shellと呼ぶ。4枚合わせHP Shellは、プランが正方形となることから、多用途に用いられているが、倒壊例も報告されている。また、力学的性状を体系的に調べた研究も少なく、不明な点が多い。そこで、RCによるモデル実験・解析から力学的性状を明らかにしたいと考えている。そしてこの研究結果が、4枚合わせHP Shellを設計する際に参考となり、より安全な構造体が設計できるようになればと考えている。

「石川県下の古建築における屋根瓦の研究」

金沢工業大学大学院 笠研究室所属
卒業論文 大形昌典

石川県内では南加賀地方で見られる赤瓦、金沢市内や能登地方で見られる黒瓦、金沢城で見られる鉛瓦などがある。このように多様な瓦が見られるのが、この地域の特徴である。卒業論文ではこれらの瓦がどのように成立し、発達・普及してきたのかを明らかにすることを目的とし、研究を行った。

江戸時代に石川県で生産された赤瓦には、越前系赤瓦と南加賀系赤瓦の2種類があり、明治前期には黒瓦が生産されていた。また、金沢市街では江戸時代には赤瓦を

使用していたが、明治10年代には黒瓦が使用されるようになった。一般の町家に本格的に瓦葺きが普及し始めたのは、昭和初期のことであった。このことから、黒瓦が開発されてから普及するまでには、半世紀以上かかったことが明らかになった。

修士論文では新しいテーマで研究を行おうと考えている。現在、金沢にある卯辰山寺院群の調査に参加している。実測調査を通じて近世社寺建築の空間構成の特徴を明らかにしたいと考えている。

「店舗設計」

金沢工業大学 建築学科 卒業制作 檜木研二



「福井市中心商店街における自転車駐車の実態」

福井工業大学大学院 建設工学専攻
卒業論文 入交 宏

福井駅周辺は学生や会社員などの通勤・通学などの買い物をはじめとしたさまざまな目的の自転車で溢れています。歩道上に何のためらいも無く駐輪されているそれらの自転車は、初め違法駐輪ではないかという疑問がありましたが、そこは歩道上に設けられた駐輪施設であり、駐輪整理員の方が日頃から整理をしてくれています。

そこで、その駐輪施設に人々はどのような目的で、またどれくらいの時間その場所に駐輪しているのかを調査・研究するのが我々の目的であり、防犯登録番号に着目し、実態調査を行いました。防犯登録番号に着目することにより、その自転車に対する詳細な駐輪動向を把握することができ、過去にこのような調査が行われた例がないため、有用なデータが得られたと思われます。

そのデータをもとに、福井駅周辺の歩行者と自転車利用者双方の安全で、快適な空間を創造できればいいと考えております。

「mental ~心療内科」

富山建築・デザイン専門学校
卒業制作 宮崎琴江

今回、卒業制作で大賞を受賞しました。昨年の進級制作は奨励賞だったので、その悔しさがまた原動力になったのだと思います。

2年間の集大成となる卒業制作で私がテーマに選んだのは「心療内科病院」でした。以前から興味があったとはいえ、やはり中身が深く、何度も煮詰まりましたが、先生方やクラスメイトにアドバイスを受け、自分でも納得のいく作品になったと自負しています。連日の徹夜でハードな毎日でしたが、今回の課題を通して、改めて建築が好きだということを実感しました。これから本当のスタートだと認識し、自分に甘んじることなく様々なことを吸収していきたいと思っています。



石川支所便り 「金沢街並雑感」

先日始まったばかりの愛・地球博。掴み所のないテーマに、控えめなパビリオンや出展内容にも苦心の後がうかがえますが、そこそこ盛況の様子。博覧会といえば奇抜なパビリオンと相場が決まっていますが、その最たるものがご存知1889年パリ万国博のモニュメントとして建設されたエッフェル塔です。設計コンペで選ばれたこの「鉄の貴婦人」は当時相当難産だった様です。設計案を見たパリの芸術家たちの「講義文」からも、その様子が伺えます。「巨大で黒々とした工場の煙突のようにパリを支配し、歴史的建造物はすべて影が薄くなってしまおう。」と容赦ありません。今でいうPFI的手法で建設運営させたこの塔はやがて市民権を勝ち取り、今ではパリのスカイラインになくてはならないシルエットとなっています。

歴史的街並と新しい技術や価値との折り合いを、どうつけていくかは永遠の課題ですが、景観問題に敏感な当地金沢でも最近話題となるモニュメントが2つ完成しました。「21世紀美術館」と金沢駅の「もてなしドーム」。新しい価値観や高度な技術を実現し、両者とも金沢の文化的インキュベーターとして、重要な役割を果たしていくことでしょう。

でも、でもです。やはり視覚的シンボルが欲しいのです。都市を認識する基準点となる“へそ”です。茶屋街などヒューマンスケールの街並継承スポットに加えて、伝統や歴史性の濃淡漂う金沢の街並のヴァニシングポイントが欲しいのです。その筆頭候補としては、風景の連続性からいっても金沢城天守閣の再建が順当なところでしょうが、何か新しい遺伝子を持った象徴としての復活を願います。例えば、もともと行政の施設だった訳ですから、最上階に街を見下ろせる市長と市民との意見交換ホールなど如何でしょう。張子の虎ではない市民の意思の象徴として復活できれば、これは魂の入った景観施設として誇れるものになると確信します。

清水建設 穴井伸二
(一枚目は、表紙に記載)

富山支所便り

「富山県における大規模地震災害時の対応について」

恒例の建築サロンが今年も開催されました。(2.26) 今年のテーマは、やはり新潟県中越地震でした。

1. 新潟県中越地震の概要
 - (1) 地盤・RC造の被害状況
 - (2) 木造の被害状況
 - (3) 鉄骨造を中心とした空間構造物の被害状況
2. 安全と安心のために
 - (1) 支援状況等
 - (2) 災害廃棄物の処理
 - (3) 防災ネットワーク構想

中越地震の調査報告会はこれまでに各団体で行われていますが、今回はこれまでとは違った視点を加えたところに特徴があります。第1部の被害状況の調査報告では、金沢工業大学で開催された速報会で報告されていないものが多かったようです。

第2部ではまず、富山県の支援です。富山県地域防災計画に基いて、今回の対応がなされたのでした。支援活動の第一は被災者の住居対策です。応急危険度判定、被災証明、住宅の提供などがすばやく行われたとの報告でした。周辺の25の県からの応援を含め、延べ3,800人を超える判定士が活動をしました。この制度が制定されてからは、初めてともいえる大規模の地震災害であり、問題点などが多く指摘されています。

新潟支所便り

新潟中越地震発生から2日後の2004年10月25日における旧長岡市の避難者数(指定避難所やそれ以外への避難)は約5万人を超えた。避難生活の中で体調を崩す人も多く、エコノミー症候群などで亡くなる人もおられた。その要因として心身の疲労などの様々な要因が挙げられ、温熱環境に起因する要因もあると思われる。ここでは、避難生活時における温熱環境について概観し、今後の災害時の対策に一石を投げられればと願う。

筆者は多くの学校の温熱環境について調査してきた。夏季や冬季における体育館内の温熱環境は、校舎内で最も好ましくない環境であることや健康な先生や児童および生徒が比較的不快な環境であると評価していることがわかっている。これは体育館の場合、断熱・気密性への配慮が十分になされておらず、容積が大きいために環境調節が容易ではないためであろう。盗難や授業再開時の空間の確保などの問題はあがるが、校舎内で比較的良好な温熱環境が保てる普通教室やエアコンなどが整備されているコンピュータ室などの特別教室を避難場所として使用できないだろうか。近年の自然災害による避難数の増加傾向や

災害の発生直後は、マスコミのニュースに取り上げられることも多く、災害の状況がかなりわかります。しかし、災害による廃棄物の処理がどのように行われたかという報道はありません。

倒壊家屋の残骸、浸水家財道具、下水道設備の崩壊や避難所などからのし尿も含めて災害廃棄物といえます。昨年は中越地震だけではなく、北陸地方の各地でも多数の災害がありました。大量の災害廃棄物が発生しました。その県内では処理しきれず、他県に依頼せざるを得なかったわけです。富山県では、福井県の水害で発生した廃棄物4500tを焼却処分しました。今回の支援もそれ以上の規模になると思われます。

隣県での災害ということもあって富山県からも数多くの人達が救援や調査に現地に入りました。とはいえ、建築関係に絞ってみても具体的に誰がどこで何をしていたのかということがなかなかつかめていないのも事実です。今回のことを教訓にして、このような動きの全体を把握して効率よくできるようにしようということが「防災ネットワーク構想」のきっかけです。建築学会が中心になって、行政や建築関連の諸団体に呼びかけていこうという提案がなされました。

今後、支所のメンバーを中心にしてこのネットワーク作りに向けての活動が期待されるところです。

(株)三四五建築研究所 北岡正弘

地域に開いた学校および生涯教育時の学校利用などの動向を踏まえると、広い年齢層の利用者を念頭においた学校建築や校舎内温熱環境のあり方について再検討する必要があるのではないだろうか。

また、車中やテント内および温室での避難生活では、車の空調や簡易的な暖房器具および防寒具を備えていても車体やテントおよびビニール1枚を境に外部環境にさらされる状況では快適な環境で過ごしているとは言い難いことから、より快適な環境が得られる避難場所の速やかな確保が望まれる。従って、行政側では日頃から借家や賃貸アパートやマンションなどの空室状況や建物の構造および築年数などの情報の整備が必要であろう。

長期にわたる避難生活を考えれば、仮設住宅の室内環境にも目を向けるべきであろう。断熱材や庇および防音材などの設置や外部からの視線を気にせず窓を開放できるような配置計画などの多くの事項を加味した仮設住宅計画を国がある程度提示しておく必要があるのではないかと。

新潟青陵大学 飯野 由香利

福井支所便り

「ドーナツの穴」

先日行われた「福井駅前まち暮らしのかたち」コンペにおいて、最優秀賞をいただいた。福井駅前、他の地方都市の例に漏れず、郊外への移住によるドーナツ化が進んだ地区である。現在、福井駅の新築に伴う再開発が進み、街の新旧が入れ替わる最中である。

コンペの主旨は空洞化した中心部の住民を増やすことで、再開発後も出口が見えない商店街の衰退の打開を図ろうとするものであった。

私の案は、2階より上に空室が目立つテナントビルとアーケードの屋根が利用されていないことに着目したものである。空室を住居に改装し、アーケードの屋根を住民の共有テラスに改築する。また、アーケード下の歩道からアーケードを貫く形で各住居へと繋がる外部螺旋階段を新設する。既存の建物内の動線は将来の商業用動線として残し、住居専用の外部動線を新設することで、内外両方の動線による商住分離の自由度の高い賃貸形式を提供できる案であった。

歩道から直接に住居への螺旋階段が繋がる為、縦動線は官地と民地の両方にまたがることとなる。深

刻化した住民の減少と空きテナントビルの有効利用を、官民両方の協力により解決出来る案である。地方都市は、良くも悪くも官民の距離が近いように思う。ただ、その距離の近さが活ければ、まちづくりの新しい決定基軸を示せるのではないかとコンペ案の実現を期待している。

都市の郊外がドーナツの生地により出来ているとするならば、空洞化したドーナツの穴に再び同じ生地を流し込むのでは物足りない。例えば、中心にアンを詰めたアンドーナツのようにひと味違うものが求められているように思う。



清水隆之建築設計事務所 清水隆之

長野支所便り

「大学の講義から」

建築家として住まいを中心に設計活動をしなが、信州大学の建築コースにて非常勤講師として住宅の課題を担当しています。

建築設計の現場で実務と向き合う僕が建築教育に関わる意味は何かと考えると自分自身(教師)の建築に対する姿勢や生き方を見せていくことにあると思う。

自分の学生時代を振り返っても師の建築に対する姿勢から多くを学んだ。良い教師とは学生の建築に対する考え方、スピリットを高めて建築が好きになるように刺激を与えていくことだと思っている。

住宅の課題では、異なるかつ隣り合う三つの敷地から一つの敷地を選択することにより、リアリティのある住まいを条件のもとに組み立てることになる。長野県という風土や歴史性も尊重すべき土地柄であるが、ここではあえて長野市郊外の住宅地を選定してある家族像を出題している。構想は自由なのだが、授業のはじめに最近の家族像の様々な形態について触れ、前年度の優秀案を見せることにより、住まいは与えられるものでなく、自らが暮らし向きを考え、どのように家族像を巡る物語を構想するかに向かう。

時代の要求から、何をストックしていくのかという提案、サステナブルな問いも住まい手とどう結びつけていくか。また家族というか居住単位が向こう三軒両隣とどう関わっていくか?ということもあり、実際の土地は周辺環境のあり方とともかなりリアリティを与えていくと思うのです。

心地良い居場所というテーマを与えています。二年生後期の課題ということもありここでは三つのレベル差を要求しています。家族像というか、居住単位のアイデアとか社会的なリアリティを考えてもらいます。ひとり、ひとりとエスキースをしながら対話をしていくと出身地また育ってきた環境により考え方が様々なこともわかります。自らいろんな体験や構想を重ね、実際の優れた住まいを見て、眼を養い、コンピュータに向かうまえに、何枚にもわたるエスキースをして手を動かし、友人と語り合い、建築を創作する喜びを感じてほしいと思う毎日です。

片倉隆幸建築研究室 片倉隆幸

いきいき街づくり

「小諸市 町並み保存とまちづくり」

「みんなで詩情ある小諸の町並み・景観を育て活かしていきましょう。」をテーマにNPO法人「小諸町並み研究会」が発足して6年が過ぎようとしています。その間に千葉大学工学部福川研究室を中心として町並み調査を行いました。歴史的建築物を約15棟調査し、各地区に提言をまとめて発表会を実施しました。また地元建築専門家チームによる細部のデザイン調査も実施し「まちづくり読本」を作成し、建築物の歴史やエピソードの紹介をしました。また各地区で出前ワークショップを行い、町並みのデザインの特長、修理、修景の方法など地元の皆さんと勉強会を重ね、まちの活性化への取り組みを行いました。また「町並みミュージアム」を4年に渡り開催し、まち全体をミュージアムにして各建物に解説板を設置し、

子供達や親子で町並みを歩き、クイズ方式で郷土再発見するイベントを行いました。延べ2500名の方に参加して頂き、高い評価を得ました。我々が自ら町の中へ飛び込み、各地域の皆さんと共に考え行動し、行政とパートナーシップを組み、小諸の町の活性化に繋げていこうという趣旨のNPO法人「小諸町並み研究会」です。



NPO法人「小諸町並み研究会」
JIA登録建築家 甘利 享一

シリーズ 隠れた建築

「Y字校舎の仕掛け」

呉羽中学校舎は他に例の無い設計方針で計画されている。吉阪隆正の方針は生徒と生徒の出会いを最重要視しているということだ。

校舎は3教室のクラスターによる階段室型であり、かつ片廊下の導線（ベランダ）を中庭を囲んで確保し、各棟をつないでいる。この外廊下は冬季の悪天時には通行が困難だったため、使いにくいという声多く、改築に至る理由になっているが、それでもベランダの良さを評価する声は少なくない。

呉羽中学校ではホールを囲む3教室の生徒は同級生のような付き合いになり、かつ、階段がホールを踊り場としているため、上下の移動の際には各階の生徒とも顔見知りになる。また、管理棟や特別教室棟への移動は外廊下を通ることになるが、その際には違う学年の生徒との出会いが発生する。しかも、中庭を円形に囲むベランダに全校生徒が出ると、全校集会が行え、3階のベランダをつなぐブリッジから生徒会長が全員の顔を見ながらの演説が出来た。全国大会に出場する相撲部の壮行会などにも使われた。

中学生というのは子供から大人への変化の時期。そこで身につける一番大切なことは、お互いの人間関係ではないだろうか。かって、教育施設は「教えるため」の計画でつくられて来た。最近では生徒の自主的な「学ぶため」の機能を盛り込むようになっている。それらも必要ではあるが、多様な生徒同士が出会い、付き合いを経験し、大人となっていくために必要な建築計画という視点は充分には取り込まれていない

ようだ。

呉羽中学はその点ではたぐいまれな挑戦を行い、かつ成功した事例だろう。

すでに解体工事が行われようとしているが、改築に至った経緯の多くの判断が誤解に基づくように見える。まことに残念である。



富山県庁土木課 小林英俊

日本建築学会北陸支部ニュース「AH!」第28号

発行日

発行 日本建築学会北陸支部広報部会

飯野 秋成（新潟） 玉井 泰子（富山）

早見 洋平（長野） 山崎 幹泰（石川）

葉袋 奈美子（福井）

事務局 穴井 伸二・瀬口さゆり

〒920-0863 金沢市玉川町15-1

パークサイドビル3F

TEL & FAX 076-220-5566